

## 六波羅蜜寺地藏菩薩像と運慶建立の地藏十輪院

《キーワード》 康慶 玉眼 五輪塔

三宅久雄

### はじめに

鴨川の東、東山山麓にある六波羅の地は、古くからの墓地の入口にあたり信仰を集めてきた。平安時代後期には、平家一門の屋敷がこのあたり一帯に建ちならぶようになっていった。やがて平家が滅び、代わって政権をとった鎌倉幕府はこの地に重要な出先機関、六波羅探題をおいた。六波羅蜜寺はそうした地であり、平安時代以来の仏像を伝えている。とくに鎌倉時代に入って、東国武士のための仕事を多く行った運慶率いる慶派の仏像が多く残っていることは、こうした当地の歴史を反映したものと考えられる。

寺内の十輪院に祀られていたと伝えられる現存の地藏菩薩坐像(図1)は、古くから運慶の作と言われてきた。また運慶が洛中八条高倉に建てた私寺、地藏十輪院の本尊であったという伝えもある。この地藏十輪院旧本尊説についてはともかく、作者については運慶と断定する研究者も多く、少なくとも否定的な意見はみられない。

しかし、具体的な制作時期をはじめ、この像の見方は必ずしも一定ではない。筆者もかつて簡単に私見を述べる機会があったが、その後、運慶作という立場から、建久七年(一一九六)をあまり下らない頃に亡くなった父康慶の菩提のために造像したのではないかという考えを述べたことがある。<sup>②</sup>ただ概説書であったので詳細には論じられなかった。これは二〇〇四年のことであったが、その後、興福寺の仏頭が運慶の作と判明し、<sup>③</sup>また最晩年の運慶作品も発見され、<sup>④</sup>既に話題を集めていた足利義兼関係の大日如来像二体とともに、<sup>⑤</sup>運慶研究は活況を呈してきた。またごく最近、六波羅蜜寺の仏像について詳細な調査が行われ、その報告もなされた。<sup>⑥</sup>これを機に、これらの調査研究に学びながら、あらためて六波羅蜜寺地藏菩薩坐像についての考えをまとめておきたい。

## 六波羅蜜寺と地藏十輪院

六波羅蜜寺には遅くとも江戸時代には十輪院という堂があり、運慶、湛慶合作と伝えられる地藏菩薩像が安置されていたことがよく知られていたらしい。

『山州名跡志』卷之三六波羅蜜寺の項に次のとおり記されている。

十輪院、在開山堂北、本尊、地藏菩薩坐像二尺五寸許、作運慶、湛慶兩作、脇壇左運慶像坐像二尺五寸許、自作、右湛慶同上自作、本尊造立ノ起ハ、或時運慶ガ夢ニ、渺々タル野径ニ行クコトアリ其時忽然トシテ、貴僧出現セリ、慶心中ニ思ク、是只人ニアラズト、此僧慶に向テ宜ク、汝日頃地藏菩薩ノ像ヲ造レリ、然レドモ未其相好アタハザル處アリ、此故ニ其相ヲ見セシム、我ハ是地藏菩薩ナリトテ、光明ヲ放テ、暫彼妙相ヲ見セシメ忽然トシテ失玉ヘリ、慶覺テ後感涙袖ヲ潤シ、貴敬ノ掌ヲ合ス、終ニ湛慶ト共ニ其真影ヲ寫ス、此本尊是也、縁起意、此尊ノ相形、左手ニ宝珠ヲスユ、右手ニ錫杖ヲ持、蓮台ヨリ左ノ足ヲ下シ玉ヘリ、是ヲ延命地藏ト号ス

これによると十輪院本尊地藏菩薩像は像高約二尺五寸の坐像で、脇壇には左に運慶像、右に湛慶像が祀られていた。この本尊地藏菩薩像は、運慶が夢に見た地藏菩薩の像を湛慶と共に造立して安置したものであると伝えられ、これには縁起が存していたらしい。そしてその形は左手に宝珠、右手に錫杖を持ち、蓮台に坐り、左足を踏み下げており、延命地藏と呼んでいたという。

次に六波羅蜜寺に蔵される版木のうちに『夢見地藏略縁起』が

ある。<sup>(7)</sup>これには『山州名跡志』で伝えているような本尊の縁起が述べられている。それによると、運慶と湛慶が同時に同じ夢を見て、覚めて後にこの地藏菩薩の像を半身ずつ造って合わせた。そして永く随侍するために運慶、湛慶は各々自身の像も造って傍らに安置したというのである。

この『夢見地藏略縁起』ではさらに続けて次のような記載がある。夢見地藏と呼ばれて信仰を集めていたが、建保六年（一二一八）に炎上したので高雄山高山寺金堂に遷したが、嘉禄元年（一二二五）「六波羅十輪院」を再建し、もとの如くに安置したという。これは十輪院なる堂がもともと六波羅に存したようにもとれてはつきりしない。

ところで運慶は京都に地藏十輪院という名の寺を建てたことがわかっていて、『高山寺縁起』金堂条に次のごとく記される。

一本佛

中尊木像周丈六盧舍那如来 佛工運慶作

脇士十一面觀自在菩薩相伝之伝教大師本尊云々  
或説弘法大師御作云々

弥勒菩薩

四天王等身像各一軀 并各三尺侍者

持国天円慶作 改名運覚

增長天湛慶

広目天康運 改名定慶

多聞天康海 改名康勝

右本仏并四天王像者、本是洛城地藏十輪院運慶建  
立堂本尊也、而建

保六年、彼十輪院炎上畢、其後且怖洛中火難、且爲上人本尊運

慶法印奉渡之、(中略) 去貞応二年四月八日奉移安当寺本堂畢、凡此像、此運慶并弟子等、数年之間留手尽心、所令彫刻也、頗以後代宝物者歟(後略)

これによると、運慶が京都に建立していた地蔵十輪院が建保六年(一二一八)に焼亡したので、再度の火難を恐れて、また明恵上人の本尊とするために、本尊盧舎那如来像と四天王像を貞応二年(一二三三)四月八日に高山寺の金堂に移したという。

さて、運慶の子湛慶は文暦二年(一二三五)地蔵十輪院の丈六阿弥陀如来像を大原来迎院へ移安している。この阿弥陀如来像は湛慶が二親のために嘉禄三年(一二二七)に木造りを始め、寛喜元年(一二二九)に完成していた。<sup>(8)</sup>ここでは地蔵十輪院は「八条高倉地蔵十輪院」と記されていて、当時の具体的な所在地が判明し、かつ建保に炎上して以後、復興されて、この時までには存在していたことが確かめられる。

先の『夢見地蔵略縁起』で建保六年に炎上した堂を、六波羅蜜寺十輪院のごとくに記している。厳密には当時の地蔵十輪院の所在地は明らかではないが、おそらく『高山寺縁起』などの史料の取り違えによる誤りではないだろうか。従って同縁起にいうように高山寺から六波羅蜜寺に像を戻したということも根拠がないかと思えるが、ただ、六波羅蜜寺における十輪院の復興を嘉禄元年とすることは何らかの史料に基づいたものかもしれない。湛慶が丈六の阿弥陀如来像を造りはじめたのが嘉禄三年であったから、あるいは嘉禄元年の復興とは八条高倉の地蔵十輪院のことではないだろうか。

六波羅蜜寺地蔵菩薩坐像が運慶建立の地蔵十輪院の仏像で、運慶

自作であるということは早くから指摘されていた。<sup>(9)</sup>この地蔵十輪院と六波羅蜜寺との関係について、小林剛氏は史料の根拠を示していないが六波羅蜜寺内にあった地蔵堂が地蔵十輪院の「名跡」を伝えていたとしている。<sup>(10)</sup>また毛利久氏は『山州名跡志』に言う地蔵菩薩・運慶・湛慶の諸像を現存の像に当たるとし、六波羅蜜寺の十輪院は運慶建立の地蔵十輪院の後身であり、ひいては地蔵菩薩像は運慶自作の像に当たると考えた。<sup>(11)</sup>これに対し、杉山信三氏は『山州名跡志』に記す十輪院の地蔵菩薩像は現存の地蔵菩薩坐像とは形状に相違がある点、疑問が残るとし、「まして、この十輪院と高山寺へ本尊を渡した運慶の十輪院と関係があったと考える根拠はない」と指摘した。そして、六波羅蜜寺は平安末期には平氏一門の居館や寺堂に囲まれており、運慶作と伝えられる地蔵菩薩坐像は平清盛が造らせたのではないかと推測した。<sup>(12)</sup>

この説は久野健氏が平清盛の発願とするには運慶の年齢を問題として反対したが、作風から現存地蔵菩薩坐像が運慶作であることと認め、地蔵十輪院と六波羅蜜寺との関係については言及せず、六波羅蜜寺に運慶が地蔵菩薩像を造って寄進しても不思議ではないとした。<sup>(13)</sup>

その後、地蔵十輪院と六波羅蜜寺との関係についての研究に進展はみられない。像そのものについては、積極的に地蔵十輪院旧本尊と認めないまでも、六波羅蜜寺地蔵菩薩坐像を運慶の作とすることについては否定的な意見はみられない。

ただし杉山信三氏が指摘したように、『山州名跡志』に記す六波羅蜜寺十輪院の地蔵菩薩像が「左の足を下し」として、いわゆ

る片足踏み下げ形式であつたらしいことは形式上の大きな違いとして看過できず、現存像が直ちに十輪院像に当たるとみるには無理があるろう。

### 技法上の特色

本像はきわめて古風な一木造りになることが従来から知られていたが、最近、X線透過撮影を含む精細な調査がなされた。その報告によつて構造の概略を記しておく、頭体部は通して木心を込めた一材から木取りしており（左袖部を含む）、この根幹部に右肩外側に別材を刳いでいる。頸部は割り離していない。体部のみ背面から内刳りし背板を当てている。両脚部は横木一材製で、体部との刳ぎ面より膝の左右それぞれに内刳りを施し、そこに地藏菩薩の印仏を納入していることが昭和十年（一九三五）の修理によつて明らかになった（図2）。

玉眼を嵌入するために面部を割り離しているが、内刳りは面部材に玉眼嵌入のために施すのみで、頭部には内刳りはない。体部の内刳りには後に触れる五輪塔形のような木柱状のものを納めており、両脚部も体部も通常の内刳りとしてではなく、もっぱら納入品のためであるように思われる。

鎌倉時代に入つて一木造りの像自体、数少ないが、加えて本像のような内刳りの仕方は特徴的である。また、こうした構造・技法上の顕著な特色は、確固たる一木造りへの志向と、これと相反するかのような玉眼への執着をはつきりと示している。

この点できわめて他にあまり例を見ない珍しい作と言えるが、運慶の造像のなかにこれに類する作例を見出せる。運慶は建暦二年（一一二二）、子息をはじめとする一門を率いて興福寺北円堂の弥勒仏等の造像に当たつた。中尊弥勒仏坐像と無著・世親像が現存するが、ここで後者の構造に注意しておきたい。まず無著像は頭体を通して軀幹部は一材から木取りし、さらに両肩から外側部にそれぞれ一材を刳いでいる。体部は背面に大きく一材を刳いでいる。中央軀幹部は頭頂まで一材で、頭部だけみると後頭部材を当てることもしていないので完全に一木で、従つて玉眼を嵌入するために面部を刳いでいる。世親像は軀幹部は前後二材を寄せ、両体側もやはり前後二材を寄せている。玉眼は前後の刳ぎ面からの刳りを利用して嵌入しているらしい。またいずれも耳孔、鼻孔は内刳りに貫通している<sup>15</sup>ので、無著像の頭部にも内刳りを施しているようである。

この無著像の方は頭体通して一木、体部のみ背面に一材を刳ぐところ、面部を刳いで玉眼を嵌入するところなど、坐像と立像の違いはあるが基本的に六波羅蜜寺地藏菩薩像と同工である。ただ無著像では頭部にも内刳りを施しているところが幾分一般的になっている。

これら無著・世親像の担当仏師は中尊弥勒仏坐像の台座墨書によると、世親像は運賀または運勝、無著像は運助または康□と報告されている。運慶の子息六人のうち、四天王像は長男から四男までが頭仏師として担当しているところをみると、この無著・世親像は五男運賀、六男運助が担当した可能性が高いであろう。

中尊弥勒仏坐像は前後左右の四材刳ぎ、割り首とするもので、両

脇侍像と四天王像は失われてしまったのでわからないが、多様な構造であった可能性はあろう。これらの中にあつては、無著・世親像は表現や造り方に比較的自由がきいたであろう。この両像の一木あるいは一木風の造りは、どっしりとした重量感と安定感に富む造型、大きく流れる太い衣文にふさわしい構造と言える。年若い末子が担当したということであればなおさらであるが、誰が担当したにせよ、この二像にも頭領としての運慶の意図と力量が示されていることに異論はあるまい。

松島健氏は六波羅蜜寺地藏菩薩坐像が鎌倉時代にあつては特異な一木造りであることから、「他からの依頼によるものでなく運慶故人の試みの造像であり、その奉安の場としては、彼自らが営んだ持仏堂のような私堂こそふさわしく思え、運慶が洛中に建立した地藏十輪院の旧本尊であつたとする毛利久氏の説をあらためて重視したい<sup>16</sup>」と述べており、像の技法上の特色を踏まえた見解は注目される。伊東史朗氏も「仏師本人の発願<sup>17</sup>」であろうと、同様の考えを示している。ただし、これが八条高倉の地藏十輪院でなくとも、六波羅蜜寺内の十輪院あるいは運慶や慶派ゆかりの私堂であつても当てはまることではあろう。

## 玉眼の使用について

運慶の玉眼使用についていち早く着目した松島健氏は、「仏・菩薩像には玉眼を用いないのが一つの特色」と指摘し、円成寺大日如来像が如来形であるにも拘わらず玉眼を使用しているのは、「この

時にはまだ明確な造像理念を有していなかった<sup>18</sup>」のではないかとされた。また西川杏太郎氏は、「玉眼技法の濫用を自ら避け、天部・明王あるいは肖像など、とくに玉眼を効果的に使用できる場合を除いては、できるだけ従来<sup>19</sup>の彫刻的技法だけで目を表現しようとした」と指摘した。

運慶の玉眼使用の制限は大方の認めるところとなつたが、この玉眼使用の原則がいつ確立されたのかということとは、六波羅蜜寺像の制作時期の推定にも影響を与えることとなる。願成就院阿弥陀如来像(図3)は現状、玉眼を嵌入する場合と同じように一旦両眼を剝り抜いた後に、内側から板を当ててこれを塞いで、彫眼のようにしている。本像は顔面に後世損傷を受けているので、その時の補修とみなされ、当初は玉眼を嵌入していたようである<sup>20</sup>。

松島健氏は六波羅蜜寺地藏菩薩像の制作は「玉眼の使用にこだわれば、浄楽寺諸像を手がけた文治五年(一一八九)以前<sup>21</sup>」とし、明らかに彫眼を選択した浄楽寺像より以前と判断した。伊東史朗氏は、運慶にとつて仏・菩薩像における玉眼は「むしろマイナスの効果<sup>22</sup>」とし、忿怒の表情において「積極的に造型上のポイント<sup>23</sup>」として玉眼を使用したことを評価しているが、玉眼の使用は「必ずしも原則どおりにいかなないところもある<sup>23</sup>」と指摘した。玉眼を嵌入した真如苑大日如来像が発見される以前の考えであり、とくに松島氏の場合には文治五年(一一八九)制作の浄楽寺諸像以後は一貫して仏・菩薩像には玉眼を用いてないという前提であつた。

ただ二〇〇四年に山本勉氏によって運慶作であることが明らかにされた東京真如苑の大日如来坐像が玉眼を使用していることから、

運慶の仏・菩薩像における玉眼の不使用という原則は徹底していなかったことは確かとなった。<sup>(24)</sup>

ともかくも、六波羅蜜寺地藏菩薩像を制作した時点では、この仏師あるいは願主には玉眼に対する強い好みがあったと思わざるを得ない。

六波羅蜜寺像の制作時期について、筆者は玉眼の有無に拘わらず、作風と推定される制作背景から建久七年（一一九六）をあまり下らない頃の運慶作と考えているので、もし先のように私的な造像ということを重ねるならば、玉眼は他でもない運慶自身の意図したところということになる。浅見龍介氏は「玉眼を採用するか否かはやはり注文主の意向も考える必要がある」と指摘している。<sup>(25)</sup>もし本像が注文制作であったとするならば、玉眼については注文主の意向ということも言えようが、少なくとも古風な一木造りについては仏師の発意であったのではないだろうか。

### 慶派と地藏菩薩

地藏菩薩は死後、地獄の苦しみから救い、成仏へと導いてくれる仏として、とくに平安時代後期に入ってから急速に信仰が隆盛していった。鎌倉初期に地藏菩薩像が造られること自体はとくに珍しいことではないが、慶派の地藏菩薩造像ということで注意を引き始めたのは、静岡瑞林寺地藏菩薩像の研究がきっかけであろう。牧野あき沙氏は銘文の再検討によりこの地藏菩薩像が慶派の祖康慶によって造られたことを明らかにし、また結縁者の分析から像が制作され

た治承元年（一一七七）当時、康慶がすでに東国の武士との関わりを有していたと考えられることを明らかにし注目を集めた。先代の奈良仏師康朝等の菩提を弔うため、大仏師法橋康慶が小仏師やその他の人々の結縁を得て造像したことに着目し、「仏師自身が願主となり、それを自ら銘文に表した最初の像」であると指摘した。<sup>(26)</sup>

副島弘道氏は、康慶は建久六年（一一九五）に多武峰の平等院に自分が願主となって板絵六地藏を描かせ、運慶は京都に地藏十輪院を建立し、また康清は嘉禎三年（一二三七）祖父運慶、父康勝らの冥福を祈って東大寺念仏堂地藏菩薩像を造立したことから、「康慶・運慶一門にとって、地藏菩薩像は何か特別の意味がある仏像のように思えてくる」と述べ、「六波羅蜜寺地藏菩薩像も、運慶が自分自身の祈願をこめた像かもしれない」と推測している。<sup>(27)</sup>

最近では奥健夫氏が、「同派の先人仏師の名を像内に籠めてその菩提を弔うことが、慶派による地藏菩薩像において一つの系譜を形成している」と指摘した。<sup>(28)</sup>先の静岡瑞林寺像、東大寺念仏堂像のほかに、建長元年（一二四九）康円作ドイツ・ケルン東洋美術館地藏菩薩像の結縁交名の一つに法橋康勝の菩提のためとあり、また弘安元年（一二七八）、大仏師東大寺流法橋行慶作の愛媛大乗寺地藏菩薩像は銘文に「法印但慶尊霊」とある事例を加えている。そして「運慶は自らの氏寺として京都八条高倉に地藏十輪院を建てており、一門として地藏信仰をもっていたと考えてよいであろう」と述べている。

さて六波羅蜜寺の地藏菩薩坐像については、副島氏が言う運慶自身の祈願とはいったい何であったのだろうか。今となっては想像す

るよりほか術はないが、もし誰かの菩提を弔うということがきつかけとなったのであれば、運慶が一寺院を建ててまでとなると父であり師である康慶ではないだろうか。父、というより慶派の祖としての康慶の菩提を弔い、祖康慶に見守られて一門の安寧と繁栄を心から祈ったのであろう。康慶は自分の一字「慶」をとって子を運慶と名付け、運慶はやはり慶の字をとって長男を湛慶と名付けた。意外なことに、子息のうち慶の字がつくのは湛慶だけである。後世はともかく、少なくとも運慶自身は慶の字のつく家系をはっきりと意識していたに違いない。

### 地蔵十輪院の創建

では地蔵十輪院はいつ頃創建されたのであろうか。『高山寺縁起』によると建保六年に炎上したとあるから、言うまでもなくそれ以前ということになる。康慶の没年が不明であり、いつになるかが問題となるが、康慶の事蹟は東大寺大仏殿の四天王像の一体を担当したのを最後とする。建久七年（一一九六）二月一〇日のことである。<sup>(29)</sup>東大寺の木彫巨像群復興の最後を飾るのが建仁三年（一一〇三）の南大門金剛力士像であるが、この造像では大仏師は運慶、快慶、定覚、湛慶がつとめており、<sup>(30)</sup>康慶の名はない。康慶がこの造像に関わることにはなかったと考えてまず間違いない。

また大仏殿四天王造像から南大門金剛力士像造像の間、運慶と快慶はそれぞれ一派を率いて東大寺外で別々に造像活動をしていたようである。運慶の方は一門を率いて建久八年（一一九七）の東寺講

堂諸像の修理、続いて翌建久九年頃までには同寺南大門金剛力士像を造っているが、ここにも康慶は登場しない。<sup>(31)</sup>これらの造像は運慶に任されたことも考えられるが、大仏殿四天王造像以後まもなく死去した可能性も高い。

話は変わるが、松島健氏は東大寺に貢献のあった人々を記す『東大寺上院修中過去帳』に康慶や快慶の名は見えるが、運慶が記されていないことを不審としている。<sup>(32)</sup>ここでは康慶が記されていることに着目する。『東大寺上院修中過去帳』<sup>(33)</sup>は一部前後するところもあるようであるが、原則として没した順序であろう。当該時期の箇所は室町時代の書写にかかる前半部分に含まれており、書写の際の誤りということも考えられるであろう。ただ他に手掛かりのない康慶の没年を推定するには参考とするに足ると思われる。

以下に康慶の登場箇所の前後の人物と、それらの判明する没年を書き出してみる。

後白河天皇 建久三年（一一九二）三月一三日（『玉葉』）

食堂盤鉢施入珍慶法師

別當俊證僧正 建久三年（一一九二）三月一七日（『東寺長者補任』）

湯屋阿伽井屋作寛秀大徳練

別當勝賢前權僧正 建久七年（一一九六）六月二二日（『東寺長者補任』）

教観擬講

造寺長官定長左大弁宰相 建久六年（一一九五）一月一日（『三長記』、『尊卑分脈』）

俊朗五師練

大仏脇土虚空蔵并増長天大仏師幸慶法眼

理真權律師

賢敏大法師練

弁雄法師練

別當覚成大僧正 建久九年（一一九八）一〇月二二日（『東寺

長者補任』）

惠舟權律師

時導師半疊并疊六枚施入覚順法橋

當寺造営大施主將軍頼朝右大将 正治元年（一一九九）正月

一三日（『明月記』、『百練抄』）

先述したように判明している康慶の事蹟の最後は、建久七年の年末に完成した大仏殿四天王造像であるから、彼の死去は建久八年または九年、おそらく過去帳において康慶より七人後に記される源頼朝死去の正治元年以後までは下らないと考えられる。先に見たとおり、東寺での運慶一門の仕事にまったく関与しなかったこととも矛盾しない。

もし運慶が父康慶の菩提のために地蔵菩薩像の造像を志したとすれば、その完成は早ければ建久八年以後、建久九年に亡くなったとすると一周忌にあたる正治元年頃までという可能性がある。

康慶の逝去に伴い地蔵菩薩像とそれを安置するための堂宇とを造ったと考えてもよいが、像だけ先に完成していたことも考えられる。『高山寺縁起』には周丈六盧舎那如来像と四天王像は運慶建立の地蔵十輪院の本尊であると記している。地蔵十輪院という名称か

らすると本尊は地蔵菩薩であったと考えられるが、後に寺として整備拡充され周丈六という大きさの仏像を本尊とし、さらに四天王像を祀るに至ったことも考えられよう。しかもこの時、華嚴の教主盧舎那如来をあらたに本尊として祀ったことは注目される。<sup>34</sup>ともかくも、もしこのように考えられるならば、六波羅蜜寺像のような等身大の地蔵菩薩像は父祖を弔う一堂から出発した私寺にふさわしく思われる。

### 六波羅蜜寺地蔵菩薩像の制作時期について

六波羅蜜寺に現存する運慶作と伝えられる地蔵菩薩坐像が、いつ頃造られたかについては本論にとつてとくに重要である。

かつては地蔵十輪院の建立を、炎上した建保六年に近い建保年中（一一二二～一八）とし、六波羅蜜寺地蔵菩薩像の造像も運慶の「技術がもつとも円熟していた晩年の建保頃<sup>35</sup>」とする見方があった。しかしその後、地蔵十輪院の建立を運慶が京都で神護寺や東寺の仏像修理や造立に携わった建久・正治の頃とみる考えが示された<sup>36</sup>。願成就院や浄楽寺の諸像にみられた力強い写実味は「六波羅蜜寺の地蔵菩薩像に至って一つの完成の段階に達した」とされ、「東国時代の野趣はまったく影をひそめ、それは運慶独自の健実豪快な写実表現のなかに昇華して行った<sup>37</sup>」と指摘された。以後、地蔵十輪院と本像との関係については保留するものの、ほぼこの頃の、あるいはもう少し幅を持たせて浄楽寺と興福寺北円堂の間の時期とする考えが大方であった。

こうした中であって、先に触れたように松島健氏は玉眼を選択した文治五年（一一八九）の浄楽寺像より以前と判断した<sup>38</sup>。また伊東史朗氏は「激しい衣文の動きが、文治二年（一一八六）の願成就院阿弥陀如来像のそれへと繋がりを持つ<sup>39</sup>」と指摘し、さらに制作時期を遡らせ安元二年（一一七六）作の円成寺像と願成就院像との間に置いた。この制作時期を早く見る考え方は玉眼使用にこだわらなくとも、作風の上からあらためて検討しておく必要がある<sup>40</sup>。

六波羅蜜寺地藏菩薩像の流動感ある彫りの深い衣文表現は願成就院や浄楽寺の阿弥陀如来像、とくに前者に近い。しかし、これらに比べると六波羅蜜寺像はがっしりとして、ひきしまった体軀には東国像に若干感じられる膨満感はない。両脚部の衣文は願成就院像がやや繁雑ともいえるのに対し、六波羅蜜寺像では腹部の襞は過剰気味であるが両脚部では願成就院像よりも数少なく、そのことで枝分かれする衣文も効果を増しており、全体に整いを見せている。願成就院像を体軀の量感と衣文の力強い流動感のもっとも顕著なものを見た場合、この点に関しては六波羅蜜寺像との前後関係を判断するのはなかなか難しい。しかし六波羅蜜寺像（図7）は、頭部が小さめで、こめかみと顎を引き締め、やや面長で、現実感を加えている。顔立ちを考慮に入れた場合、やはり文治の東国造像よりもやや降った頃の制作と考えたい。

文治二年に運慶が造ったことが明らかになった、もと興福寺西金堂の釈迦如来像頭部<sup>40</sup>（図4）は大ぶりで明快な鼻梁立ちには天平彫刻に通じる趣が強い。治承の焼失まで安置されていた天平当初の西金堂本尊像を意識したに違いないと思われ、そうした事情を考慮し

ないといけませんが、頬から顎にかけての張りのある量感願成就院阿弥陀如来像に通じるところも感じられる。しかし、六波羅蜜寺像との面貌の違いは、同一作者とすれば、同時期とみなすのには無理がある<sup>41</sup>。

近年の運慶作品の相次ぐ発見は本像の制作年代推定にも関わった。山本勉氏は足利鐔阿寺に伝わる『鐔阿寺樺崎縁起并仏事次第』により、東京真如苑大日如来像（図6）をもと足利義兼建立の樺崎寺下御堂安置の像で、建久四年（一一九三）の制作と推定<sup>42</sup>、また栃木光得寺大日如来像（図8）を足利義兼の発願したと伝える像に比定し、建久六年の義兼出家から同一〇年に没するまでの間に造られたと推定した<sup>43</sup>。これらと比較して六波羅蜜寺地藏菩薩像について山本氏は、真如苑像とはやや顔つきが異なり、もう少し時代が下がるとし、建久七年以降、消息を絶った父康慶の菩提を弔うためという立場をとった<sup>44</sup>。

筆者も山本氏とほぼ同じ見方で、真如苑像は浄楽寺像（図5）に近く、光得寺像は正治三年（一二〇一）の愛知滝山寺帝釈天像（図9）にもっとも近い。そして結論的に言えば六波羅蜜寺像の制作時期は真如苑像と光得寺像の間にあるように思える。これは主として頭部の比較によるものである。着衣の衣文表現は作風比較に有効であるが、真如苑・光得寺像はいずれも特殊な事情による特異な衣文表現であり、これらと直接比較するわけにはいかない。浄楽寺諸像造立以降、ふつうの坐像の着衣表現は建暦二年（一二一二）の興福寺北円堂弥勒仏像を待たねばならない。また願成就院や浄楽寺の諸像の例を見ると、立像の衣文表現から坐像のそれを類推するわ

けにもいかない。やはり面貌表現の比較に終始せざるを得ないし、わずかな表現の違いによるしかないであろう。両眼の表現は、六波羅蜜寺像は光得寺像ほど伏し目がちになっておらず、丸顔を基調とした願成就院、浄楽寺、真如苑像とは異なり、こめかみと顎をひき締めた面長で、光得寺や滝山寺像などのような頬から顎にかけて量感を持たせた造型にも至っていない。

総じて、六波羅蜜寺地藏菩薩像は真如苑像が建久四年の運慶作という前提に立つならば、これを下る建久年間（一一九〇～九八）後半の制作と推定したい。こうした作風からの推定が認められるならば、その制作が父康慶の菩提を弔い、慶派一門の繁栄を祈願するためであった可能性が出てくるのではないだろうか。

### 五輪塔形納入品について

最後になったが、X線透過撮影によって像内に五輪塔形木柱に似た納入品があることが明らかになった。筆者は原データを見る機会を得ていないので、浅見龍介氏の報告によると、五輪塔の空、風、火輪はそれと認められるが、ふつう球形をなす水輪部はその下にいくべき地輪との区別なく、そして下方の柱状部は丸彫りとしている。光得寺とは違って中空の筒状で、四角柱もしくは円柱であるらしい。そして筒状柱部の底には金属製と思われる壺型容器がある。<sup>(45)</sup>

願成就院のような板を切り抜いたような五輪塔形銘札、完全に立体化された光得寺の五輪塔形木柱、そして真如苑像にみられるその中間的な厚みのあまりない木札と、年代を追って発展しているよう

である。<sup>(46)</sup>

五輪塔形木柱のみについて言えば、真如苑像よりも六波羅蜜寺像の五輪塔形のほうが進んでいるようではあるが、光得寺像のような木柱タイプとの年代的前後関係は何とも言えないのではないだろうか。ただ、六波羅蜜寺像の場合、空、風、火、水輪以下をそれぞれ別製としているようであり、それが首尾よくいったかどうかは詳細がわからないが、手間がかかっていると見ることはできる。板であれ、角柱であれ、制作という観点からみるとこれらの五輪塔形とは別の意識が働いていたように思える。

仏像の像内に五輪塔を納入することは、運慶が重源を介して受容したものという考えがあるが、これについては施主や願主の役割を重要視する意見が出されている。<sup>(47)</sup>ただ、五輪塔形木柱のような像内納入の技術的な面では運慶にはじまる慶派仏師の伝統とみることもできる。<sup>(48)</sup>

五輪塔形と思われる納入品ということでも、やはり仏師としては運慶を考えたくなる。ただそれだけではなく、もし運慶一門の私的な造像であるとするならば、運慶自身と五輪塔信仰、そしてその像内納入の結びつきは親密なものと言えるであろう。運慶の他の五輪塔形には見られない工夫があるかに思われるところは、六波羅蜜寺像の特異な構造と玉眼使用にも一脈通じるところがあるのではないだろうか。

## 表現と構造

平安初期密教彫像に興味をもち、また、たくましい量感表現を求めて、技法的にも一木造りに惹かれていったと考えることができるが、ただ運慶が志向したのは平安初期のいわゆる純木彫系の表現ではなく、あくまでも天平時代から平安時代初期にかけての乾漆造や塑造のいわゆる捻塑系の諸像である。むしろ発達した寄木造りから回帰して、一本の木から彫り出すということの内に見出される神聖性を求めたのではないだろうか。

これと玉眼の使用は相反するかのようである。また「この像の造形のもつとも大きな特色は、袖の内側を彫り、衣の重なる部分には小材を貼るなどして現実感を追求した着衣の表現」と言われている。ただちに「運慶并弟子等、数年之間留手尽心、所令彫刻也、頗以後代宝物者歟」と記された地蔵十輪院の諸像を彷彿させる。しかしこのことも、一木造りとは矛盾するかのごとくである。

しかし、六波羅蜜寺地蔵菩薩像の作者にとって、それは相反するものではなかった。やや面長で、厳しい面貌にはかすかに輝く両眼をあらわし、そして先述した着衣の流動的な襞など、現実感のある神聖性を表現したかった。救いの手を差し伸べてくれる地蔵菩薩には、仏としての超越的信頼感とともに実人（康慶か）と重なるような親近感、そして救済の現実感を求めたことであろう。

本像の内削りは納入品のためであり、また玉眼嵌入のためにすぎなかつた。かつて納入品の堅固な奉籠のため、上げ底式を考案した運慶の考えの原点に戻るような感がある。両脚部の内削りには地蔵菩

薩の印仏を納めている。作者と一門の仏師、そしてゆかりの人々の結縁により祈願をこめて造立されたのであろう。

### おわりに

運慶は若き日、大願をこめて法華経を書写した。やがて自ら一門を率いる時が来た。恩師である父康慶の菩提を弔い、一門の繁栄を祈願して地蔵十輪院を建立できるまでになった。六波羅蜜寺地蔵菩薩像はその本尊としてまことにふさわしく思われる。

しかしながら、先に見たとおり六波羅蜜寺内にあった十輪院の地蔵菩薩像には当たらない可能性があるが、この六波羅蜜寺と慶派との密接な繋がりを考えると、八条高倉の地蔵十輪院にゆかりの仏像、あるいは六波羅蜜寺内に運慶一門が安置した慶派にとつとくに大切な仏像であったのではないだろうか。

### 注

- (1) 三宅久雄「地蔵菩薩像 六波羅蜜寺」〔国華〕一〇〇〇、一九七七年五月
- (2) 三宅久雄『鎌倉時代の彫刻―仏と人のあいだ―』〔日本の美術〕四五九、至文堂、二〇〇四年八月
- (3) 横内裕人『世要抄』に見える鎌倉期興福寺再建―運慶・陳和卿の新史料―〔仏教芸術〕二九一、二〇〇七年三月
- (4) 瀬谷貴之「称名寺光明院所蔵 運慶作 大威徳明王坐像」〔金沢文庫の仏像〕神奈川県立金沢文庫、二〇〇七年四月
- (5) 山本勉「足利・光得寺大日如来像と運慶」〔東京国立博物館紀要〕二三、一九八八年三月

- 山本勉「新出の大日如来像と運慶」(『MUSEUM』五八九、二〇〇四年四月)
- (6) 浅見龍介「『調査報告』六波羅蜜寺の仏像」(『MUSEUM』六二〇、二〇〇九年六月)
- (7) 元興寺仏教民俗資料研究所編『六波羅蜜寺の研究』(綜芸舎、一九七五年四月)
- (8) 「湛慶注進状」(『来迎院文書』所収)
- (9) 「運慶を中心とする鎌倉彫刻展」(奈良帝室博物館、昭和八年四月一日～五月一日)
- 『鎌倉彫刻図録』(奈良帝室博物館、一九三三年一月)
- (10) 小林剛『仏師運慶の研究』(『奈良国立文化財研究所学報』、一九五四年九月)
- (11) 毛利久「運慶・快慶と高山寺・十輪院」(『史迹と美術』二五五、一九五五年九月)
- (12) 杉山信三「六波羅蜜寺の地藏堂について」(『史迹と美術』三三〇、一九六二年一月)
- (13) 久野健「運慶の彫刻」(学生社、一九七四年一〇月)
- (14) 前掲注(6) 浅見龍介「『調査報告』六波羅蜜寺の仏像」
- 奈良国立文化財研究所編『日本美術院彫刻等修理記録Ⅵ』(一九七九年一月)
- (15) 倉田文作「無著菩薩立像・世親菩薩立像」(『奈良六大寺大観 興福寺』二) 岩波書店、一九七〇年一月)
- 山本勉「興福寺 無著菩薩像・世親菩薩像」(『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代 造像銘記篇二』中央公論美術出版、二〇〇四年二月)
- (16) 松島健「運慶の成功とその理念」(『日本美術全集』一〇 運慶と快慶) (講談社、一九九一年八月)
- (17) 伊東史朗「院政期仏像彫刻史序説」(『院政期の仏像』(京都国立博物館、一九九二年三月)
- (18) 松島健「運慶小考」(『MUSEUM』二四四、一九七一年七月)
- (19) 西川杏太郎「運慶の作例とその木寄せについて」(『仏教芸術』八四、一九七二年三月、同『日本彫刻史論叢』中央公論美術出版、二〇〇〇年一月、所収)
- (20) 西川新次・水野敬三郎「阿弥陀如来像、不動明王及び二童子像、毘沙門天像 願成就院」(『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代 造像銘記篇一』中央公論美術出版、二〇〇三年四月)
- (21) 前掲注(16) 松島健「運慶の成功とその理念」
- (22) 伊東史朗「運慶」(『日本美術史の巨匠たち 上』(筑摩書房、一九八二年八月)
- (23) 伊東史朗「高野山不動堂の八大童子像と運慶」(『京都国立博物館』学叢』六、一九八四年三月、『平安時代彫刻史の研究』名古屋大学出版会、二〇〇〇年四月、所収)
- (24) 前掲注(5) 山本勉「新出の大日如来像と運慶」
- (25) 前掲注(6) 浅見龍介「『調査報告』六波羅蜜寺の仏像」
- (26) 牧野あき沙「瑞林寺地藏菩薩坐像の銘文と仏師康慶」(『美学・美術史学科報』二八、跡見学園女子大学、二〇〇〇年三月)
- (27) 副島弘道「運慶―その人と芸術―」(吉川弘文館、二〇〇〇年九月)
- (28) 奥健夫「鎌倉中期の東大寺と仏師」(『論集鎌倉期の東大寺復興―重源上人とその周辺―』東大寺、二〇〇七年一月)
- (29) 『東大寺造立供養記』などによるが、史料によって年時に混乱がみられ、左の文献がこの間の事情を検討・整理している。
- 毛利久「第四 東大寺復興における重源と奈良仏師」(『仏師快慶論』吉川弘文館、一九六一年一〇月、同増補版、一九九四年九月)
- (30) 水野敬三郎「金剛力士像 東大寺」(『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代 造像銘記篇二』中央公論美術出版、二〇〇四年二月)
- (31) 『東寺講堂御佛所被籠御舍利員数』、『東宝記』第一講堂条・南大門条。
- (32) 上横手雅敬・松島健「対論 運慶とその時代」(上横手雅敬・松島健・根立研介『運慶の挑戦』文英堂、一九九九年七月)
- (33) 『東大寺二月堂修二会の研究 史料編』(中央公論美術出版、一九七九年一月)
- (34) 松島健氏は前掲注(32)「対論 運慶とその時代」において、東大寺大仏の雛型との関係に注目している。
- (35) 前掲注(10) 小林剛『仏師運慶の研究』
- (36) 毛利久「運慶と鎌倉彫刻」(平凡社、一九六四年一〇月)
- (37) 毛利久「運慶様式の形成」(『研究』神戸大学文学会、一九六九年一月、同『日

本仏教彫刻史の研究』法蔵館、一九七〇年五月、所収)

- (38) 前掲注(16) 松島健「運慶の成功とその理念」
- (39) 伊東史朗「院政期仏像彫刻史序説」『院政期の仏像』京都国立博物館、一九九二年三月
- (40) 前掲注(3) 横内裕人「『世要抄』に見える鎌倉期興福寺再建―運慶・陳和卿の新史料―」
- (41) 形式上のことになるが、天平創建当初像は白毫が無いことで有名であったが、『七大寺巡礼私記』、この鎌倉再興像もそれを踏襲して白毫をあらわさない。
- (42) 前掲注(5) 山本勉「新出の大日如来像と運慶」
- (43) 前掲注(5) 山本勉「足利・光得寺大日如来像と運慶」
- (44) 山本勉『運慶にであう』(小学館、二〇〇八年九月)
- 山本勉「大特集 運慶」(『芸術新潮』、二〇〇九年一月)
- (45) 前掲注(6) 浅見龍介「『調査報告』六波羅蜜寺の仏像」
- (46) 前掲注(5) 山本勉「新出の大日如来像と運慶」
- (47) 田邊三郎助「重源と運慶・快慶」(『MUSEUM』三五〇、一九八〇年五月、同『田邊三郎助彫刻史論集』中央公論美術出版、二〇〇一年五月、所収)
- (48) 前掲注(5) 山本勉「足利・光得寺大日如来像と運慶」
- (49) 岩田茂樹「西教寺・逆手来迎印阿弥陀如来像と像内納入五輪塔柱」(『仏教芸術』二二二、一九九七年三月)
- (50) 前掲注(6) 浅見龍介「『調査報告』六波羅蜜寺の仏像」
- (51) 『高山寺縁起』
- (52) 水野敬三郎「院政期の造像銘記をめぐる二、三の問題」(『美術研究』二九五、一九七五年、同『日本彫刻史研究』中央公論美術出版、一九九六年、所収)

三宅久雄(みやけ・ひさお)

一九七二年 大阪大学法学部卒業

一九七五年 神戸大学大学院文学研究科修士課程修了

同 文化庁美術工芸課文部技官

一九八七年 東京国立文化財研究所美術部第一研究室長

二〇〇三年 宮内庁正倉院事務所長

二〇〇五年 奈良大学教授(現在に至る)



图1 地藏菩薩像 京都 六波羅蜜寺



图2 地藏菩薩像 兩脚部解体 京都 六波羅蜜寺



图3 阿弥陀如来像 静岡 願成就院



图5 阿弥陀如来像头部 神奈川 浄楽寺

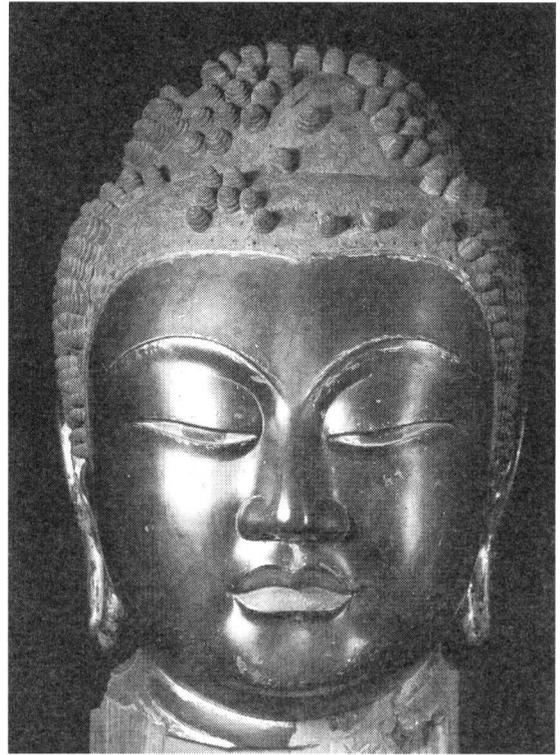


图4 釈迦如来像 头部 奈良 興福寺



图7 地藏菩薩像 頭部 京都 六波羅蜜寺



图6 大日如来像 頭部 東京 真如苑



图9 帝釈天像 頭部 愛知 滝山寺



图8 大日如来像 頭部 栃木 光得寺